ツナグ×デキル

WE CAN PROJECT
黒潮町缶詰製作所

vol.1
発行＝黒潮町缶詰製作所
高知県幡多郡黒潮町入野4370番地2
TEL 0880-43-3776

最大津波高 34.4m

内閣府の発表に、町長はじめ幹部職員は**言葉を失いました。**

翌日2012年4月1日、その日は日曜日にもかかわらず職員たちは役場に集まり、町民からの問い合わせに備えました。しかし、危惧した問い合わせは数件。当時を振り返り町長は「町民はあきらめたのだろうか…」と思ったといいます。

こんなに穏やかで美しい砂浜が、もしもの時に自分たちに襲いかかるなんて信じることができません。でも、**町民の命を**守りたい、希望を持って暮らしてもらいたい。戦うのではなく、自然とうまくつき合っていく術を考えよう。

あきらめたらいかんぞ！

あきらめない考え方、あきらめない思想を創ろうと町全体へ広げる「黒潮町方式の防災への取り組み」がスタートしました。町長から担当職員まで全員が覚悟を決めると同時に一致団結した日でした。

しかし、**現実はきびしいものでした。**その34.4mの数字を突きつけられたとき、ある高齢者が言った言葉です。

「そりゃ役場の問題じゃない、けんど、この高さの津波が来たら逃げろうにも、わしらあは正直、逃げきれんき、もうえい…」と。

これを聞いた町は、なんとかあきらめずに知恵を絞りだせないものかと考えました。命を守ること、それは地震の揺れが収まったら、ただちに逃げるということを町民に**徹底して理解してもらう**ことでした。

そのための訓練や地道に調べあげた避難経路など、細分化された防災計画を行政主導でなく、地域住民と一緒になって作りあげ、実践に即した防災計画づくりを目指すことにしたのです。

全職員が防災担当になって

発表があって2ヶ月で、町の職員約200名全員が防災担当となって、各地域に張り付く制度をスタートさせます。昼間は役場の業務をこなし、夜間は200名の職員が地域ごとに防災ワークショップの開催をスタート。

一般的に行政の活動だと避難前の調査だけでも数年単位になりますが、この取り組みのスピードは異例でした。約3ヶ月間で156カ所のワークショップに、のべ4634人の町民が参加。町の本気度に呼応したかのように、想像以上の反応に町も驚きを隠せませんでした。

ワークショップでは回を重ねるごとに**「役場も本気じゃ、大変やねえ」**と労いの言葉とともに、防災への意識が高まっていく成果を感じはじめていました。

あきらめない思想が町民と一体となりはじめると、住民からの要望も増えるようになり、避難道240路線、避難広場168カ所、避難タワー5基の整備が一気に進みました。

そして、町と一体となったこの考え方は、やがて避難する海岸集落と避難を受け入れる山側集落との「共助」につながり、**住民交流**という副産物を生みます。

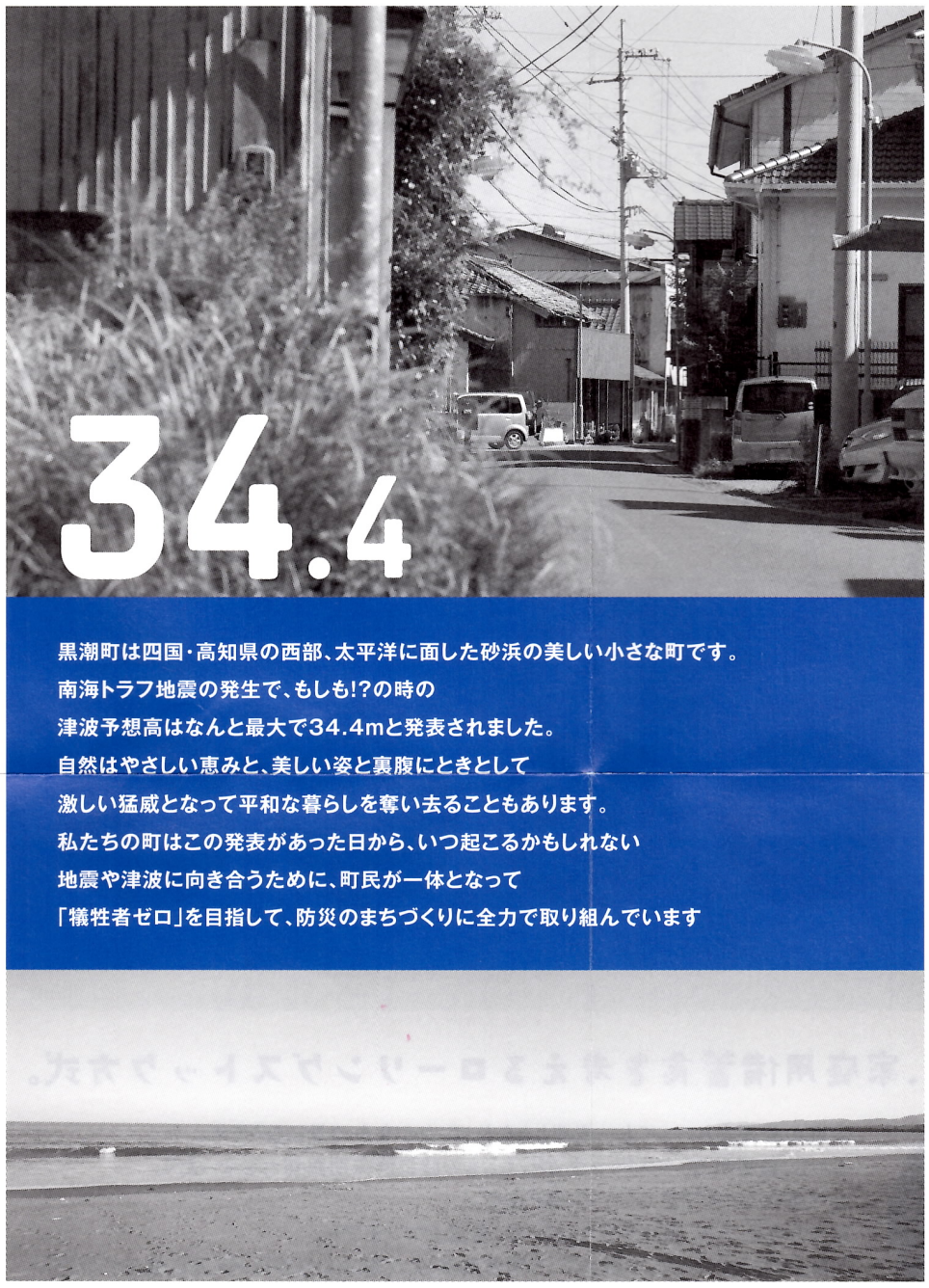
お互いが助け合うという現実の先に、存在していたのが避難後の生活で最も重要とされる「食」で命をつなぐという課題です。「ほんなら避難者の備蓄食料も自前でやらないかんねえ」その意見から、津波や防災という負のイメージも逆に町をつなぐ活動に生まれ変わります。**未来につながる光が**差した瞬間でした。

住民交流という副産物

ついに戸別カルテ100%回収に

2014年1月、3791世帯最後の戸別カルテが揃いました。戸別避難カルテとは世帯ごとの避難手段をまとめたもので、各家庭によって年齢とか病気とか避難・援助・耐震状況などが違います。それらすべての情報が集まってこそ、机上だけでない本当の意味での町全体の避難計画が具現化します。大西町長が発表の時に言った**「あきらめない思想」**が形になった瞬間です。

ワークショップを重ね、この避難カルテによって町の雰囲気は大きく変わり、町が進めるハード的な防災対策と、町民の意識向上によるソフト面とが合致しました。さらに町内61地区中、39地区が地区防災計画づくりの取り組みをはじめました。



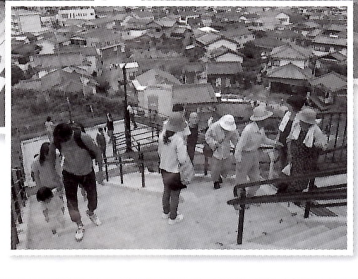
黒潮町は四国・高知県の西部、太平洋に面した砂浜の美しい小さな町です。
南海トラフ地震の発生で、もしも!?の時の
津波予想高はなんと最大で34.4mと発表されました。
自然はやさしい恵みと、美しい姿と裏腹にときとして
激しい猛威となって平和な暮らしを奪い去ることもあります。
私たちの町はこの発表があった日から、いつ起こるかもしれない
地震や津波に向き合うために、町民が一体となって
「犠牲者ゼロ」を目指して、防災のまちづくりに全力で取り組んでいます

防災教育・子どもたちの避難訓練から

町は未来を担う**子どもたちの**防災にも力を入れています。津波から逃げられる体力を養うマラソンを開催したり、独自の防災プログラムを考案し、年間10時間以上の防災教育と6回以上の避難訓練を義務付けるなど、教育現場でも子どもたちの防災意識の基礎をつくりあげています。

また、この児童たちと避難訓練を共にしている大人も、訓練を重ねるうちに児童の心の中に、他人を助けたいという思いが強く育つといいます。教育現場も含めて小さい頃からの啓発活動と、訓練などの実践が、未来の**子どもたちと一緒に**「もしもに備える毎日」につながっていきます。

小学校で防災教育



もしもに備える毎日につながっている

どうせやるなら**アレルギー対応を。**防災備蓄で生活をつくろうと集まったチームのひとりが言います。「町長が〝犠牲者ゼロ〟を目指せと言うちょうけど、東北の気仙沼で聞いたらアレルギーの子どもたちに食べるものがないと言いよった」

確かに、誰もが安心して食べられる缶詰じゃないと、もしかしたらダメじゃないのだろうか、という考えがよぎります。

こんな小さい町の缶詰工場だから無理と最初からあきらめるのでなく、全員を守るという高い信念とヤル気をもってさえすればできる。**方法論を探ってみよう。**原材料の調査や工場のレイアウトも含めて精査していけば絶対できると、あきらめませんでした。

そしてもうひとつの〝あきらめない〟が発揮されます。それは7大アレルゲン不使用の缶詰づくりへの挑戦です。